

二重拘束的コミュニケーションが情報処理 および情動に与える影響**

青木 みのり*,***

INFLUENCES OF DOUBLE-BIND COMMUNICATION ON HUMAN INFORMATION PROCESSING SYSTEM AND EMOTION

Minori AOKI

The purpose of this study was to explore the influences of double-bind communication on human information processing system and emotion, and to examine how vocal information with incongruence of tone of voice and verbal content would be perceived and memorized. The experiment was carried out with 2×2 design of (tone of voice : positive vs negative), and (verbal content : positive vs negative). The subjects (80 female undergraduates) were derived into 4 groups of 20 persons each. Subjects while presented tape-recorded passages were asked to rate some scales about the passages, and to reproduce the passages as close to the original as possible. The results were as follows : 1) passages perceived as incongruent by subjects were recalled less than those perceived congruent ; 2) recall errors were induced by the tone of voice ; 3) subjects with high trait anxiety recalled less than those with low trait anxiety when perceiving incongruence, and 4) the passages with negative tone of voice and positive verbal content were perceived incongruent, while the opposite (positive tone of voice and negative verbal content) was not.

Key words : double-bind, incongruence, communication, recall, trait anxiety.

問 題

日常の会話では、実に多くの情報が複雑にからまりあってやりとりされているのが普通である。音声によって伝えられる言葉の字義どおりの意味と、その時の声や顔の表情、さらには当時者同士の関係や周りの状況全てがあいまって1つの意味をなし、解釈される。

同じ言葉でも、それが語られる文脈によって意味が全く違ってしまふことがよくある。例えば“結構です”という言葉は、その時によって受諾を表わしたり拒否を表わしたりするし、その度合いも、語調などによって随分違う。私達は相手の表情やそれまでの会話の流れなどを総合して的確に意味を掴み、スムーズに対応しているのである。

ところが会話における文脈と字義通りの意味の食い違いが、病的なニュアンスを含み、当事者を混乱させる場合がある。Bateson et al. (1956) によって提唱された、いわゆる二重拘束 (double bind) 状況である。二重拘束は“コミュニケーションの病理で、表出されるメッセージとそれに対立し矛盾するメッセージが同時に伝達され、受けとった側が一貫した満足のいく方法

* お茶の水女子大学 (Ochanomizu University), 旧姓 渡辺。
** 本稿は、1990年度お茶の水女子大学修士論文の一部を加筆・修正したものである。本研究の一部は日本発達心理学会第3回大会において発表した。
*** 本論文の作成にあたりご指導いただいた国際基督教大学の藤永保教授、お茶の水女子大学の春日喬教授、内田伸子教授に深く感謝の意を表します。

で行動できなくなる” (平木, 1981) という定義が一般に広く受け入れられている。例えば子供が母親に承認を求めた場合、母親が口では“いいわよ”と言いながら顔では険しい表情をしているといった状況である。この場合子供は母親の言葉の字義通りの意味での肯定のメッセージと、無言のうちに伝達される非難や否定のメッセージとのどちらを受け取ってよいか分からず、立ち往生してしまう。臨床心理学の見地からは、幼少期に二重拘束的コミュニケーションにさらされる機会が多いと、会話の文脈を的確に把握する能力が損なわれ、コミュニケーション障害や対人関係の障害を起こしやすいと考えられている。また心理療法の1つである家族療法には、分裂病の患者の家族には二重拘束的コミュニケーションが多く見られるという“二重拘束理論”がある。

このように臨床的には多くの示唆を含み、実践家達によってその存在を注目され続けてきた二重拘束であるが、今まであまり実証的な研究が行われて来なかった。しかし臨床場面における観察による事実も重要だが、情報の伝達という側面から見た場合、実際にどのような歪みがおこるのかについて、よりミクロな視点からの実験による研究が必要だと思われる。そこで本研究では、二重拘束的情報伝達の影響を実験によって明らかにすることを目的とした。具体的には、声の表情と内容とに不整合がある音声情報の記憶の実験を行い、記憶の量、記憶の誤り、情動および思考に引き起こされる葛藤を検討することによって、二重拘束の影響を明らかにすることを試みる。

以上の目的から、二重拘束の影響を、認知心理学の理論によってとらえ直す必要があると思われる。記憶がその人の主観的な経験を反映していることは、多くの臨床家により指摘されてきた。その上記憶の実験は実験操作が比較的機械的に行えたとともに、被験者による意識的な操作が結果に影響しにくい。以上の点から、記憶の実験は、主観的経験を客観的に測定するために適した手段だと思われる。

まず、不整合のある情報が記憶されやすいか否かを検討する。連想ネットワーク理論 (Bower, 1981) によれば、様々な情動はそれぞれがネットワークの中で一つ一つのノードを持ち、それらの情動と結びついた出来事と強く連結している。情動の活性化はそれと連結したカテゴリーを準備状態にし、その逆も成り立つ。このため、言葉とそれが語られる口調との情動が一致している程、よく記憶されると考えられる。これとは逆に Hastie (1984) の因果的思考の理論によれば、矛盾の

ある情報は奇異に感じられるため注意を引きやすく、また納得のゆく理由を見出そうとして因果的思考を引き起こすので認知システムに大きな負荷がかかり、印象に残るので、記憶されやすいと言える。よって不整合な情報の方がよく記憶されるという、全く逆の予想も成立する。しかしまた、注意は認知的処理資源を消費し、他の処理の遂行を妨げる (Klatzky, 1984) ので、注意が大きく喚起されることで、文章の記憶が妨げられる可能性がある。従って、因果的思考によって一部の印象が強まることはあっても、まさにその部分に向けられた注意のために文章全体の記憶はむしろ妨害されると考えられ、結果的に全体の記憶が促進されることはないだろうと結論できる。以上より、二重拘束的音声情報の記憶は、口調と内容との整合性が高いほどよく記憶されることが予測され、本研究ではその検証を行う。

次に、不整合のある情報の記憶はどのように変容するだろうか。三須 (1970) および安西ら (1985) は、声の調子が音声情報の意味の理解に大きく影響することを見出している。よって不整合があった場合、言葉の意味が口調の表わす感情に近付けて解釈されることが予想される。また、Bransford & Johnson (1972) の指摘するように、被験者の解釈したことは文章の一部として記憶される可能性がある。さらに矛盾のある情報の記憶は、矛盾を解消するように変容してしまう (Spiro, 1980) という報告がされている。以上より、口調と内容とに不整合がある情報の記憶は、矛盾を解消するように、また口調の表わす情動により近くなるように、変容することが予想される。

二重拘束がメッセージの受け手の思考や情動に混乱と葛藤をもたらすことは、どのようにとらえられるだろうか。まず、口調が文章の意味の理解におよぼす影響 (三須, 1970 ; 安西ら, 1985) を考慮すると、被験者自身が口調と内容とに不整合を感じるほど、引き起こされた混乱も大きいと予想される。さらに、奇異な情報は、受け入れがたいものとしてまず知覚され、次に納得のいく理由を見つけるために因果的思考が行われる (Hastie, 1984) ので、因果的思考の量は、思考の葛藤の大きさを反映しているものと考えられる。また、思考の葛藤のために文の意味が明確に把握できないと、被験者は情動面でも混乱し、不安を抱き、否定的な感情を経験するため、因果的思考にもその感情が影響する。よってその内容が否定的である場合、情動の葛藤の大きさを反映しているのではないかと思われる。よって、被験者自身が感じた不整合が大きいほど、不整合に対

する因果的思考が引き起こされるほど、またその内容が否定的であるほど、思考および情動の葛藤は大きかったものと考えられる。

さらに二重拘束の影響には、当然個人差が考えられる。荘巖(1975)は、特性不安の強い人は、音声による感情の判定が困難であると指摘している。よって口調と内容に現れる感情に矛盾がある場合にも、特性不安の影響が現れるであろう。また Taylor & Spence (1952)によれば、作業状態が拮抗反応を生じしやすい場合には、不安が抑制的に働き、作業が妨害される。二重拘束によって引き起こされる葛藤は、拮抗反応状態と考えられる。以上より、特性不安の高い被験者は、二重拘束的音声情報の記憶において、低い成績を示すものと予想される。このことは、個人差としての特性不安の影響を示すとともに、二重拘束が情動に引き起こす葛藤を示唆するものと考えられる。

以上より、本研究では、以下の3つの仮説を検証することを目的に実験を行う。

仮説1 音声情報の記憶では、被験者が口調と内容に整合性があると感じるほど、再生成績は高くなる。

仮説2 口調と内容とに不整合があると、不整合を解消するように内容の記憶が変容する。

仮説3 特性不安の強い人には、口調と内容に不整合がある音声情報は、記憶されにくい。

実 験

目 的

上記の3つの仮説を検討することを目的とする。

方 法

被験者 女子大学生80名。

刺激 ある家庭の母親が家族に向かって話しかけているという状況を想定して、肯定的及び否定的内容の材料文をそれぞれ作成した****。次に演技の専門家に依頼して、それぞれの材料文を肯定的口調及び否定的口調の両方で読みあげてもらい、それを録音して刺激として使用した。その際、演技者には、肯定的口調は「楽しく、浮き浮きした感じ」、否定的口調は「悲しく、残念な感じ」と教示を行った。材料文を TABLE 1 に示す。

実験計画 材料文の内容(肯定的・否定的)×口調(肯定的・否定的)の2×2の完全独立型の実験計画とし、肯定的口調×肯定的内容(P-P群)、否定的口調×肯定的内容(N-P群)、否定的口調×否定的内容(N-N群)、肯定的口調×否定的内容(P-N群)の4つの群を設け、それぞれ20名の被験者をランダムに割り当てた。

TABLE 1 材料文

肯定的材料文	否定的材料文
皆が揃うのは/本当に久しぶり	折角久しぶりに皆が揃うはず
ね/とても嬉しいわ/いろいろ用意があるから/手伝ってちょう	だったのに/がっかりだわ/もう全部用意はしてあるのよ/おま
だい/今日は天気もいいし/気持ちが良いわね/そういえば、お花を買ってきたのよ/どこに飾り	けに雨まで降ってくるし/おちこんじゃうわね/そういえばお花を買ってきたのよ/必要な
ましようか/花なんかあると/うききするわね/なにかも予定どおりにいくな/て/珍しい	なかつたね/なんだかお花を見てると/空しいわ/どうして駄目に
なわね/でもきつとうまくいくん	なつちゃうのかしら、いつも/今度もそうじゃないかと/思っ
じゃないかと/思ったの/楽しみにしていたかいが/あって/よ	ていたのよ/楽しみにしていたのに/悲しいわ/もう片付けてし
かつたわ/さあ、支度を始めま	まいましょう/こうしていても
しょう/そろそろ時間だわ/	仕方ないわ/

/はアイデアユニットの区切りを表わす

手 続 被験者には記憶の実験であることは知らせない目的で、「これは、ある家庭で実際に起こったことを、できるだけ忠実に再現するために、その家庭の母親を、劇団の人に演じてもらったものの録音です。これを聞いて、演じられている母親が、どんな人で現在どんな気分にいるかについて、後で質問しますので、よく聞いていてください。」という教示のあと、材料文をテープレコーダーで提示する。提示後、①材料文の内容の理解度②演じられている母親に対する好感度③母親の現在の気分の楽しさ、についてそれぞれ0～6の7段階尺度で評定してもらおう*****。次に④母親の

**** 本研究では、肯定的な内容とは「自己充足感・期待感・相手に対する受容」が経験されるような内容である。否定的な内容とは「悲哀・挫折感・相手に対する拒否」が経験されるような内容である。メッセージが肯定的か否定的かについては、送り手と受け手それぞれからの見方があると考えられる。送り手にとっては、上述の経験や感情を相手に伝えようとするものであり、受け手にとっては、送り手がそのような経験をしていることが感じられたり、また受け手自身が肯定的あるいは否定的な感情を抱くようなメッセージである。このことについて、多くの場合送り手と受け手の間にそれほど大きな差は見られない。しかし、二重拘束のような病理的なメッセージは、必ずしもそうとは言いきれない。そこで本研究では二重拘束が受け手に与える影響を調べるため、受け手に着目して研究を進めた。受け手にとって口調・内容が実際に肯定的・否定的と受け取られたか否かについては、被験者の感想や、母親への好感度などによったが、厳密な区別については、さらに検討を重ねる必要があると思われる。

***** 評定の段階は、①理解度(全くわからなかった0～6大変よく理解できた)②好感度(全く好ましくない0～6大変好ましい)③気分(大変ゆううつな気分0～6大変楽しい気分)とした。

パーソナリティについて8つの形容詞対を用いたSD法で評定したあと、⑤材料文の自由再生を筆記により行う。その後⑥材料文の内容と口調の整合性について被験者自身がどう感じたかを、“全く不釣り合い0～6大変良く釣り合っている”の7段階尺度で評定してもらい、さらに二重拘束の情動への影響の個人差を明らかにするため⑦顕在性不安尺度(MAS)で被験者自身の特性不安を測定した後、因果的思考が行われたか否かを知るために、⑧材料文を聞いて受けた印象や⑦の整合性の評定の根拠について感想を聞いて終了する。

結果と考察

TABLE 2に、再生成績、理解度、整合性、好感度、気分及びMASの得点の各群の平均値と標準偏差を示す。

TABLE 2 各項目の平均値と標準偏差

	再生	理解度	整合性	好感度	気分	MAS
P-P群	7.2 (2.2)	4.0 (1.2)	3.4 (1.8)	3.5 (1.3)	5.0 (1.4)	18.9 (7.0)
N-P群	6.5 (2.1)	3.2 (1.2)	0.6 (0.9)	2.1 (1.4)	1.5 (1.6)	21.5 (9.0)
N-N群	9.7 (2.7)	4.4 (0.9)	4.7 (1.9)	2.7 (1.1)	0.4 (0.5)	19.7 (7.5)
P-N群	6.6 (2.6)	3.9 (2.4)	2.9 (1.4)	3.1 (1.0)	1.4 (1.1)	18.4 (7.8)

注：() 内標準偏差

(1) 記憶の量について

再生成績は、材料文をアイデアユニット(IUと略記, IUU=1 argument+1 relation; 内田, 1982)に区切り、再生された総IU数を得点とした。また、肯定的材料文と否定的材料文とではIUの数が異なっていたので(肯定的が19個, 否定的が16個)否定的内容の材料文の再生成績ではそれぞれに19/16をかけたものを得点とした。

2要因の分散分析を行ったところ、口調及び内容の主効果が有意であった(口調 $F(1,76)=5.11, p<.05$, 内容 $F(1,76)=5.89, p<.05$)。口調×内容の交互作用も有意だった($F(1,76)=12.61, p<.01$)。Tukey法による対間比較を行ったところ、N-P群<P-P群, P-N群<N-N群, N-P群<N-N群の間がそれぞれ有意だった($p<.01$)。

次に理解度についてみると、口調の主効果は有意ではなかった($F(1,76)=0.30, ns$)が、内容の主効果が有意だった($F(1,76)=4.09, p<.05$)。また、口調×内容の交互

作用が有意だった($F(1,76)=4.86, p<.05$)。同様に対間比較を行ったところ、N-P群<N-N群の間が有意だった($p<.05$)。

整合性については、口調の主効果は有意ではなかった($F(1,76)=1.88, ns$)が、内容の主効果が有意だった($F(1,76)=22.68, p<.01$)。また、口調×内容の交互作用が有意だった($F(1,76)=35.25, p<.01$)。同様に対間比較を行ったところ、N-P群<N-N群, P-N群<N-N群, N-P群<P-P群, N-P群<P-N群の間が1%水準で、またP-P群<N-N群の間が5%水準で有意だった。

以上より、再生成績、理解度、整合性に対して、口調と内容の不一致が影響していることがわかる(FIG. 1)。さらに、この3つともN-N群, P-P群, P-N群, N-P群の順に低くなっていることから、何らかの関連があると推測された。確かに、記銘時の被験者の文章に対する理解度や整合性の感覚は情報処理の過程に影響し、記憶の量にも影響すると考えられる。そこで記憶が、被験者の内観による理解度・整合性・好感度・気分及び被験者の特性不安によってどのように規定されるかを見るため、再生成績(SA)を目的変数とし、理解度(RI), 整合性(SE), 好感度(KO), 気分(KI), MAS(MA)を予測変数として、80名全員を対象として重回帰分析を行った。その結果 $R=0.427$ であり、重相関は有意であった($F(5,74)=3.291, p<.05$)。重回帰式は、次のようであり、整合性と理解度が再生成績に大きく影響しているのがわかる。

$$SA = 0.457RI + 0.378SE + 0.003KO + 0.223KI - 0.011MA + 5.354$$

整合性と理解度の偏相関は $r=0.158$ であり、多重線型性の問題は一応ないと見なせるので、この2つは独立に作用していると考えられる。以上より、整合性が高いほど再生成績が高いと結論することができ、仮説1は支持されたとと言える。

(2) 記憶の変容について

各群の再生の誤りをTABLE 3に示す。誤りは、逐語的なものから、意味的なもの、さらにユニット同士のつながりに着目したもので、列挙した。

口調の影響による記憶の変容を最もよく示す誤りは、特にN-P群において多くみられた。同じ内容の材料文を再生したP-P群では“さあ出掛けましょう”等の、やや材料文から逸脱した内容はあるが、だいたいにおいて文脈上自然な誤りが多いのに比べ、N-P群のプロトコルには、“こんなにうまくいくと思わなかった”“うまくいくと思ったけどそうはいかない”“なか

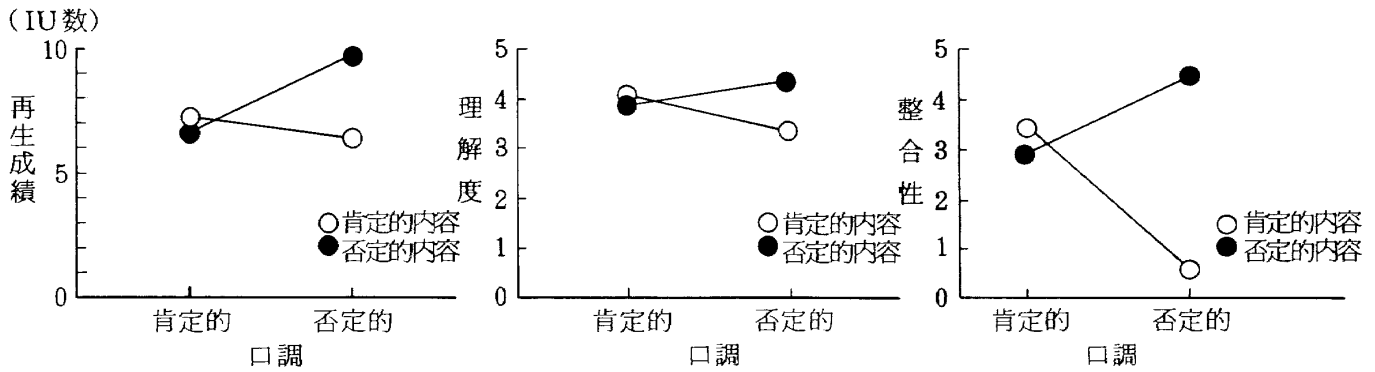


FIG. 1 各群の再生成績・理解度・整合性の平均値

TABLE 3 再生の誤り

P-P群		N-P群	
誤再生内容	数	誤再生内容	数
・こんなにうまくいくとは思わなかった	1	・こんなにうまくいくとは思わなかった	2
・駄目かと思ったけど	1	・うまくいくと思っていたけど	1
・うまくいかしら	1	・どそうはいかない	1
・どういう風にしようかしら	1	・なかなか物事はうまくいくものではない	1
・とってもユカイな気分だわ	1	・うまいか心配	1
・わくわくしちゃうわ	1	・こんなにうまくいくなんて	1
・窓側にかざる	1	・くやしいわね	1
・(花があると) 明るくなる	1	・思っていた通りだわ	1
・なんていい日なんでしょう	1	・お花があればいいのに	1
・さあでかけましょう	1	・(花があると) 明るくなる	1
・待っていたかいがある	1	・花はいいわね。変わりやすくて	1
・食事の支度	1	・用意していたかいがある	1
・待ったかいがあった	1	・待っていたかいがある	1
		・期待していたかいがある	1
		・食事をつくらなくちゃ	1
		・皆がそういう気持ちになっただのは久しぶりね	1
N-N群		P-N群	
誤再生内容	数	誤再生内容	数
・憂鬱だ	7	・憂鬱だ	1
・残念だ	2	・残念だ	7
・いやになる	6	・いやになる	6
・無駄だった	7	・無駄だった	3
・この花捨てようかしら	1	・この花捨てようかしら	2
・あーあ	5	・あーあ	5
・いつもこうなるんだから	5	・いつもこうなるんだから	7
・部屋を片付けたのに	1	・役にたたなかった	1
・みんな集まらないなんて	1	・いらいらする	1
・待ってたのに	1	・ついてない	1
・だれも帰ってこない	1	・最悪の気分	1
		・いろいろ用意するといつもこうなる	1
		・この前もこうだった	1
		・花を用意した	1
		・料理の支度をした	1
		・夕食の用意	1
		・部屋を片付けよう	1
		・元気ださなくちゃ	1
		・もういいわ	1

なか物事はうまくいくものではない”などの、現在の良い状況に対して不安を抱いたり、値引きをして記

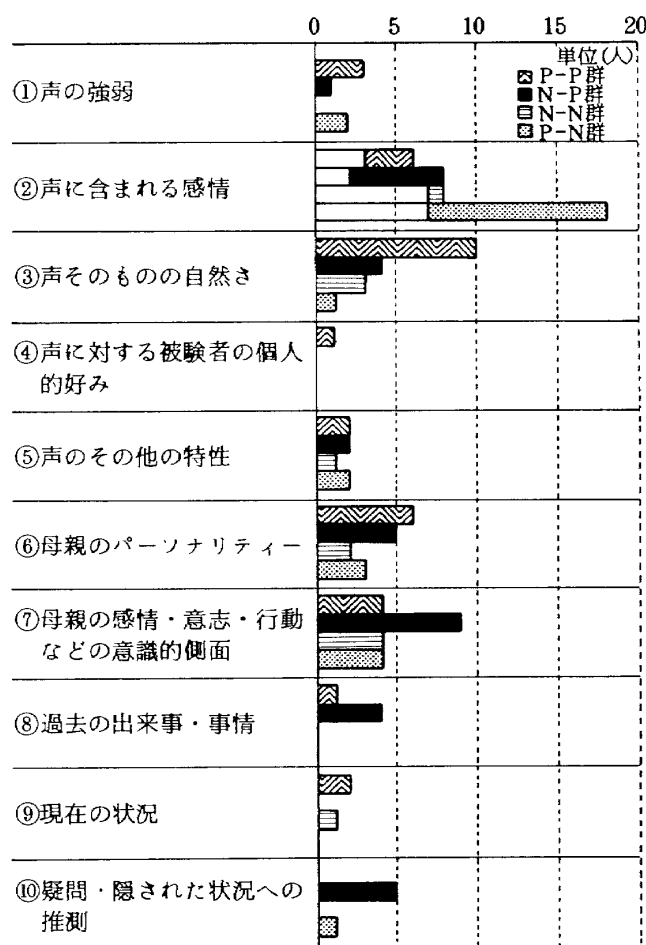
述されているものが目だった。またN-P群において“うまくいくなんてくやしいわね”という全く材料文に関係ない、むしろ正反対とも思える誤りが見られた。P-P群ではこのような誤りが2つしかないこと、N-P群のほうが再生量が少ないことを考えると、これは口調が内容の記憶に与える影響を考える上で重要な結果だと考えられる。

また、口調と内容との不整合とは直接は関係ないが、口調の影響を示す誤りが他にもみられた。同じ否定的内容の材料文を再生したN-N群とP-N群では、もとの文にない“憂鬱だ”がN-N群において、“残念だ”がP-N群において、多く再生された。特に前者では統計上の差も見られた ($t=2.49, p<.05$)。

以上より、被験者が口調と内容との関連から連想したことが、実際に聞いたかのように思われて、文章の一部として認識されることが示唆され、口調と内容との矛盾がある場合には、結果的に矛盾を解消するような形で記憶が変容したと考えられる。よって仮説2を支持する結果が得られたと言えよう。

(3) 思考および情動の葛藤について

被験者の自由口述による整合性の判断の基準を10のカテゴリーに分類したのが、FIG. 2である。一人の被験者が複数回答している場合もある。このうち①から⑤は、声の表情や内容の表面的な意味について言及したもののだが、⑥から⑩は、その背後にある状況にまで様々な憶測が行われたと見られ、因果的思考が行われたと見なせる。4つの群における整合性の評価の根拠の特徴を列挙すると、まずP-P群の特徴は、“わざとらしい”と感じた被験者が多く、7人もいたことだろう。



注1：グラフの白ヌキ部分は②を単独で用いた被験者数を表わす。

注2：10のカテゴリーの説明。①声そのものの強弱：「強い調子」など。②声に含まれる感情：「嬉しそう」「残念そうな感じ」など声そのものの属性の内感情に言及したもの。③声そのものの自然さ：「わざとらしい」「よく感情がこもっている」など。④声に対する被験者の個人的好み：「こういう声は嫌い」⑤声のその他の属性：「しゃがれている」「ぶっきらぼう」「気味が悪い」など。⑥母親のパーソナリティー：「明るい性格の人なのだろう」など、比較的恒常的なパーソナリティーに言及したもの。⑦母親の感情、意志、行動など意識的側面：「わざと明るくしている」「落ち込んでいる」など、比較的一時的な感情体験や、行動、および行動への意志に言及したもの。⑧過去の出来事・事情：「家庭が上手くいってなかった」など、過去の、背景となる事情。⑨現在の状況：母親が話している場面の状況について、作話的・独創的な説明をしたもの。⑩疑問、隠された状況への推測：整合性の直接の根拠にはならないかもしれないが「これからどうなるんだろうと思った」「良く分からなかった」など、根拠を見つけようとしてみつけれない場合。

FIG. 2 整合性の根拠

しかし、その一方で明るさは感じられる、ということから整合性はそれほど低くならなかった。N-P群は他の群に比べると、⑦母親の意識的側面、⑩疑問・隠された状況への推測をあげた被験者が目だって多く、14人になる。また、⑧過去の出来事をあげる被験者も4人おり、因果的思考を行った被験者の数は、他群に比べて高かった。その他「言ってることと声が違っていて気持ち悪い」という反応を示した被験者もいた。N-N群の特徴は、②声に含まれる感情をあげた被験者が8人で、その内7人が②を単独で用いていた(グラフの白ヌキ部分)ことであろう。声と内容の整合性の評定値が高かったことと併せて考えると、N-N群の刺激は被験者に自然に受け取られたものと推測される。このことは、被験者の思考の葛藤の大きさの指標となる複雑な因果的思考はほとんど見られず、また全体に用いられた項目の数そのものも少なかったことから、裏付けられるだろう。最後にP-N群は、②声に含まれる感情が他の群にくらべて特に多く、18人であった。その中でも10人が他の項目とあわせて用いており、感情表出のずれが感じられることについて言及している。しかし⑥～⑩の因果的思考項目は少なく、理由づけも「明るい人なのだろう」など比較的単純なものが多く見られ、不整合を感じながらもさして不自然とは思っていない様子が感じられる。

FIG. 2からも明らかのように、N-P群は⑥から⑩の理由を述べている被験者が多く、その割合を計算したところN-P群全体の83.3%であり、P-P群45.0%、N-N群37.5%、P-N群45.0%に比べ目だって多かった。このことは、N-P群の被験者が不整合な情報に接して受容しかね、その理由を考えていることを示し、思考の葛藤が引き起こされていることがわかる。整合性の評価が0.6と極端に低かったことも、これを裏付けている。さらに理由の内容も「きっと何か悪いことでもあったのでは」など否定的なものも多く、「気持ちが悪い」という感想もあったことから、情動面でも葛藤があったであろうことが推測される。

さらにN-P群において、MASの得点と再生成績とに中程度の負の偏相関がみられ、有意な傾向があった($r = -0.468$, $F(1,14) = 3.93$, $p < .10$)。そこでこの群をMAS得点が22以下の低不安群(L群: $n = 11$)と23以上の高不安群(H群: $n = 9$)とに分けてt検定を行ったところ再生成績の差は有意だった($t = 2.22$, $p < .05$)。よって、仮説3を支持する結果が得られたと言える。また、このことから、二重拘束による影響の個人差を決定する1つの要因として、特性不安を考えることの有効性

が示唆されたとともに、不安という情動面と二重拘束による葛藤との関係が示されたといえるだろう。

なお、MASの得点は、口調および内容の主効果、ならびに口調×内容の交互作用いずれも有意でなかった(口調 $F(1,76)=1.14$, ns. 内容 $F(1,76)=3.39$, ns. 口調×内容 $F(1,76)=0.12$, ns.)。このことから、被験者の特性不安の群間の差は認められず、被験者の偏りはなかったと言える。

(4) 4つの刺激について

4つの刺激の母親は、実際に被験者からどのように見えたであろうか。好感度、気分の評定およびパーソナリティ評定によるプロフィールから考察する。

2要因の分散分析を行ったところ、好感度では、口調の主効果が有意($F(1,76)=11.41$, $p<.01$)であったが、内容の主効果は有意ではなかった($F(1,76)=0.21$, ns)。また口調×内容の交互作用に有意な傾向が認められた($F(1,76)=3.68$, $p<.10$)。Tukey法による対間比較では、N-P群<P-P群の間が1%水準で、またN-P群<P-N群の間が5%水準で有意だった。この結果から、好感度が口調の明るさに大きく規定されることがわかる。

気分では、口調及び内容の主効果が有意だった(口調 $F(1,76)=65.05$, $p<.01$. 内容 $F(1,76)=70.96$, $p<.01$)。口調×内容の交互作用も有意だった($F(1,76)=21.71$, $p<.01$)。同様に対間比較を行ったところ、N-P群<P-P群、N-N群<P-P群、P-N群<P-P群の間が1%水準で、またN-N群<N-P群、N-N群<P-N群の間が5%水準で、有意だった。この結果から、気分が口調と内容の両方の影響を大きく受けていることがわかる。

8つの形容詞対による母親のパーソナリティの評定結果の因子分析(主因子法)をおこなったところ、“人あたり”“情動性”“強さ”“陽気さ”の4つの因子が抽出された。バリマックス回転後の結果をTABLE 4に、各群の因子得点の平均値によるプロフィールをFIG. 3に示す。

TABLE 4 バリマックス回転後の因子負荷量

形容詞対	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性
意地悪い—優しい	0.787	-0.283	-0.141	-0.243	0.778
静かな—激しい	-0.068	0.704	0.314	0.050	0.602
変わらない—変わり易い	-0.112	0.669	0.037	-0.107	0.473
冷静な—興奮した	0.068	0.717	-0.011	0.010	0.519
悲しい—嬉しい	0.265	0.074	0.194	-0.723	0.635
ひねくれた—素直な	0.782	0.123	-0.068	-0.258	0.697
弱い—強い	-0.097	0.122	0.509	-0.236	0.339
不愉快な—愉快的な	0.472	-0.047	0.194	-0.684	0.730
固有値 (SMC)	2.293	1.706	0.642	0.132	—

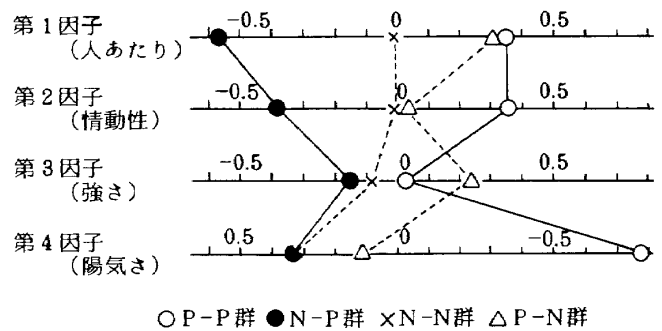


FIG. 3 各群の因子得点の平均値によるプロフィール

以上をまとめ、4つの刺激を個別にみてみると、まずP-P群は、“陽気な人”という印象が強く、好感度も4群中最も高かった。しかし“人あたり”はそれほど良くなかったことと、被験者の感想から、肯定的な感情を強く表わすことが必ずしも良い印象を与えるとは限らず、むしろ“おしつけがましい”“わざとらしい”という認知に結びつきやすいことが示唆された。次にN-P群は整合性の評価が極端に低く好感度も最低だった。明るい内容を暗く話す人物に、被験者は嫌悪感を覚えたのだろう。上述した整合性の低さや因果的思考が多く見られたことともあわせて、最も二重拘束的な状況だったと考えられる。これに対し、N-N群は整合性の評価が大変高く、気分の評定は極めて低く、否定的な感情が抵抗なく伝わった事がわかる。最後に、P-N群は上述のとおり整合性の評定は比較的高かった。また、“強さ”因子が4群中最高であることから、感情を押さえ明るく振る舞うという比較的日常的に近い場面と受け取られたことがわかる。感想の内容から、声に含まれている感情と内容をごく自然に分離してとらえている様子が感じられ、被験者の感じた葛藤も少なかったようである。

総合考察

(1) 二重拘束について

本研究では、口調と内容とに不整合のある音声情報を2種類検討したが、上述の様に、被験者による尺度評定や被験者の感想から二重拘束的な葛藤状況と見なされたのはN-P群のみであった。すなわち、口調と内容の不整合による二重拘束とは、単に口調と内容との不一致によるものではなく、否定的な口調で肯定的な内容をのべた場合に生じやすいことが示されたと言える。

これはおそらく音声情報における言葉と口調による

感情の伝わり方に関係していると思われる。荘厳(1986)によれば、口調の方が言葉そのものよりも感情を伝えやすい。そして、肯定的な情動よりも、否定的な情動の方が伝わりやすい(荘厳, 1975)。そのため、N-P群においては、口調によって伝えられる否定的な情動が、言葉そのものの肯定的な情動よりも強く感じられたのだろう。そして、葛藤は同時に2つの情動が存在するだけでなく、それらが掛け離れており、しかも否定的な情動が肯定的な情動を圧倒した時に感じられる(Harter, 1987)ことから、N-P群のみに葛藤が生じ、二重拘束的状况が生まれたと考えられる。

さらにもう1つ可能な理由として、日常的であるか否かという問題がある。ここでいう日常的とは、我々が共有しうる意味を見出しやすいということと関連している。我々は、肯定的な口調で否定的な内容を話す必要に迫られることはよくあるが、その逆はあまりない。P-N群の被験者はその内容と口調との不整合に“明るい口調で話すことによって、暗い気分を隠そうとしている”“相手に嫌な思いをさせまいとしている”などの意味を、比較的容易に見出すことができたが、N-P群ではそうではなかった。口調と内容の不整合というより、不整合ゆえに文脈とのつながりが理解できず、従って意味が見出せないということに、葛藤の原因があったのだろう。被験者は納得のいく文脈を作りだそうと、戸惑いながら懸命に因果的思考を行っていた。このような“文脈がつかめないための葛藤”はBateson et al. (1956)によっても指摘されている。またわが国の文化が、大袈裟に感情を表出することをよしとせず、時には抑制することが評価される傾向があることを考えると、P-N群に文脈が見出されやすかったことは、わが国に特有の現象とも考えられる。これに対して自己表現を重視する欧米のような文化圏ではP-N群も二重拘束的と感じられる可能性があり、この点で文化差を考慮する必要がでてくるとと思われる。

(2) まとめと今後の課題

最後に、本研究の最初の出発点である臨床心理学的な観点との関連から、二重拘束の病理性のうちの何が本研究によって明らかにされたかについてふれておきたい。まず第1に、口調との矛盾によって、間違った内容が記憶されることがある。第2に、メッセージの送り手に対し、嫌な感じが残ることが明らかになった。第3に、思考および情動に葛藤が生じることが示唆された。第4に、不安の強い人に対して特にその影響が生じやすい可能性が示された。

なお、本研究では、肯定的情動と否定的情動の2種

類の分類しか考慮しなかったが、実際の情動は2種類だけではない。より細かい分類による二重拘束の検討が必要であろう。それとともに、音声情報に限らず、顔の表情との不整合による二重拘束や、情動の素直な表出が許容される場面とそうでない場面との比較なども、今後検討されるべき課題と言えよう。

引用文献

- 安西信雄・丹羽真一・斉藤 治・増井寛治・亀山知道・平松謙一・岡崎祐士・伊藤憲治 1985 分裂病患者の感情認知・表出障害の研究(3) —感情判断と感情の模倣表現における障害— 臨床精神医学, 14, 3, 333—342.
- Bateson, G., Jackson, D., Haley, J., & Weakland, J. 1956 Toward a theory of schizophrenia. *Behavioral Science*, 1, 251—261.
- Bower, G.H. 1981 Mood and memory. *American Psychologist*, 36, 129—148.
- Bransford, J.D., & Johnson, M.K. 1972 Contextual prerequisites for understanding : Some investigations of comprehension and recall. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 11, 717—726.
- Harter, S., & Buddin, B.J. 1987 Children's understanding of the simultaneity of two emotions : A five-stage developmental acquisition sequence. *Developmental Psychology*, 23, 388—399.
- Hastie, R. 1984 Causes and affects of causal attribution. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 44—56.
- 平木典子 1981 新版 心理学辞典 p98. 平凡社.
- Klatzky, R.L. 1984 *Memory and awareness : an information processing perspective*. W.H. Freeman & Company, New York & Oxford.
- (川口潤 (訳) 1986 記憶と意識の情報処理サイエンス社)
- 三須秀亮 1970 音調テストによる分裂病家族の研究 精神医学, 12, 305—312.
- 荘厳舜哉 1975 人格要因が音声表出による情動伝達に及ぼす効果 心理学研究, 46, 5, 247—254.
- 荘厳舜哉 1986 ヒトの行動とコミュニケーション—心理生物学的アプローチ— 福村出版
- Spiro, R.J. 1980 Accomodative reconstruction in prose recall. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 19, 84—95.

Taylor, J.A., & Spence, K.W. 1952 The relationship of anxiety level to performance in serial learning. *Journal of Experimental Psychology*, **44**, 61—64.

内田伸子 1982 幼児はいかに物語を作るか？ 教育心理学研究, **30**, 3, 211—221.

(1992.8.3受稿, 1993.1.23受理)